

## 会員消息ほか

○羽田記念館（京大文学部内陸アジア研究所）—去る4月竣工式を挙行して以来、毎月2回研究発表を中心とする例会を開催しているほか、11月1日には内田吟風神戸大教授・護雅夫東大助教授・香山陽坪東海大教授・佐口透金沢大助教授の4氏を講師に迎え、「内陸アジアの研究及び討論の集い」を開催、同研究の現状と今後の課題について討論が行なわれた。また9月30日には記念館最初の出版物として『五体清文鑑訳解』上巻（田村実造京大教授・今西春秋天理大教授・佐藤長京大教授共編、B5判、本文1075頁、解題16頁）を刊行。本書は、清朝乾隆時代に編纂された満洲・チベット・モンゴル・ウイグル・漢の5ヵ国語の対訳辞典『五体清文鑑』（全36巻）の漢語を除く4ヵ国語をローマ字に転写し、これに日本語訳を加えたもので、かつて故羽田亨博士の下で一旦脱稿されていたものを、今回編者らを中心とする京大東洋史研究室のスタッフが全面的に改訂再修したものである。下巻総索引は、現在校正が進行中で、明年5月には刊行の予定。

○日本オリエント学会——第8回大会は6月25・26両日、北海道大学クラーク会館にて開催。初日は前嶋信次・三笠宮会長両氏の公開講演、二日目は研究発表（前川和也、加賀谷寛ほか諸氏）、27日は旅行と懇親会。また同会派遣の第3次西アジア文化遺跡発掘調査団（団長大島清氏）（6月～9月）はテル・ゼロールにて前2000年頃の中期青銅器時代の都市址、後期青銅器時代の銅工業の中心、鉄器時代の都市址等の発掘に成功した。第1次発掘団の報告は『西アジア文化遺跡発掘調査団報告書テル・ゼロール I 1964』（大島清編）として5月5日に同会から刊行された。Prof. W. F. Albright による紹介（BASOR 10月号）など参照。引きつづきII、IIIも刊行の予定。このほか季刊「オリエント」Vol. VIII No.1は昨年9月20日、同No. 2は1月20日発行された。さらに同会と京大文学部の共催になる Y. YADIN 教授（ヘブライ大学考古学研究所）の講演（カラースライド使用）「Hazor, a mound of 22 cities」は9月27日午後3～5時京大文学部第一講義室で行なわれた。

○西田龍雄氏（京大文学部助教授）の『西夏語の研究』下巻は4月10日発行（座右宝刊行会——上巻は本誌13号既報）、同じく『生きている象形文字—モン族の文化—』は9月24日刊行（中公新書112）された。○吉田光邦氏（京大人文科学研究助教授・本誌編集部員）の『やきもの』は6月20日出版（日本放送出版協会）。

○大島清氏（東大名譽教授）は日本オリエント学会派遣の第3次発掘団（上掲記事参照）に団長として参加（6月28日羽田発9月15日羽田帰着）された。同団の業績および同氏の編著については上記参照。○小野山節氏（京大文学部助手・本会幹事）は日本オリエント学会の上記発掘団に参加6月24日京都発、「西アジアおよび欧州文化遺跡学術調査比較研究のため」イスラエル・フランスに出張、9月26日帰学された。○梅棹忠夫氏（京大人文科学研究助教授）は「南北アメリカの人類学的研究機関の調査ならびに資料蒐集」のためカナダ・北米合衆国・メキシコに出張された（7月3日～20日）。○岡崎正孝氏（アジア経研調査研究部西アジア調査室）はインディアナ大学の International Affairs Center にてイラン近代史研究のため7月6日渡米された。○米田治泰氏は京大人文科学研究助手に新任された（7月10日）。○小谷仲男氏は日本学術振興会「西アジア地域海外研究員」として「イラン考古学遺跡遺物の資料蒐集と研究」のため8月10日伊丹発テヘランへ。明年2月27日帰国の予定。

○宮崎市定氏（東大名譽教授・元本会副会長）は8月15日羽田に帰着された（本誌15号参照）。○岡崎敬氏（九大文学部助教授）は8月発プラハの国際先史学原史学会議に出席9月帰国された。○足利惇氏氏（東大名譽教授・東海大文学部長・本会会長）は Imperial Pahlavi Library 主催の International Congress of Iranian Studies に出席のため8月28日羽田発9月12日帰国された。9月6日付テヘランよりの編集子宛来信に曰く「……予定通り先月廿八日十時半 Air France にて羽田発一路テヘランに向い申候。同じくイラン途のコンGRESに招待を受けたる蒲生礼一君（元東京外国語大学教授・現東海大学教授）と同行、途中恙なく殆んど定時刻夜半（現地時間）に到着、イラン政府の掛官の出席、大使殿及び蒲生先生の女婿の大野君（東大助教授）も飛行場まで相見え居り候。直ちに政府用意のヒルトン・ホテルに入り申候。ホテルはテヘランの北郊、エルブルズ山麓シムランに近く、高燥の地にて市中よりは温度も低く、凌ぎよく存候。もう一人の日本人の会合招待の江上波夫君（東大教授）はコンGRES開催日の前日（卅日）プラハの先史学会より直接来られ候。卅一日（水）十時よりテヘラン大学、フェルドウシー・ホールにてイラン皇帝の開会の辞によって約一週間（p. 62へつづく）

(p.54のつづき) にわたる会議が開催され候。同夕はシムランに近きサアダーバードの「白宮殿」の庭でイラニスト一同、皇帝及び皇后の謁見を賜わり申候。同夜はシムランのダルバンド・ホテルにて宮内大臣シャファ氏主催の晩餐会開かれ申候。爾後毎夜、総理大臣等々の招宴続きいささか草臥れ申候。ただダルバンド・ホテルは、今次大戦の際、チャーテル、ルーズベルト、スターリンの有名なテヘラン会談の行なわれたる処に候。翌九月一日より正式の会議が開かれ申候。わが友であり先生であるシャファ博士は健在、ギルシュマン博士も元気に存候。レンツ氏も二年前と少しも不変、チェコのクリマ博士とも言葉をかまし貴殿の名をよく覚え居り候。アメリカのフライ氏、ドレスデン氏とも会い申候。会議は general assembly の外 sectional な meeting に分れ居候。小生は philological meeting に属し、三日の冒頭に paper を読むことに相成候。室は反響のみある極めて悪き室に存候。冷房装置もなく、先生方には大分弱られし方有之候。色々お話し可申事有之候も、何れ帰国後お目にかかりし時に譲り申候。イスパハン・シーラーズの見学は飛行機のシートが一パイにて我々既知の人の多くは乍残念割愛仕候。何分、ヒルトン・ホテルと大学の間をバスで通う毎日にて殆んど市中には出ず、この二、三日市中をうろつきテヘランの気分を味い度候、その上帰国致度存居候。この日曜日には帰国、中旬には京都へ参るべく存居候。遙かに御健康祈上候「勿々」。○小林明美氏(旧姓佐藤、京大大学院博士課程)は夫君小林信彦氏(ハーバード大留学中)の許へ9月3日羽田発で渡米された。○服部正明氏(京大文学部助教授)はインド古典の講義を行なうため9月10日羽田発トロント大学へ。明年6月上旬帰国される予定。○長尾雅人氏(京大文学部教授)はウイスコンシン大学の講義を終え欧州・イラン・アフガニスタン・インド經由9月14日羽田に帰着された(本誌15号参照)。○村田数之亮氏(阪大名誉教授)の「ヒュール・ドマルニュ著『ギリシア美術の誕生』」(高橋たか子氏と共訳)は10月25日発行(『人類の美術』5—新潮社)。○勝藤猛氏(大阪外大助教授)は11月5日羽田発シーラーズの Pahlavi 大学に留学された。帰国予定は明年8月末。○加藤一朗氏(関大文学部教授・本誌編集部員)監修の『古代エジプト』は11月23日発行(ライフ人間世界史14)。○藤吉慈海氏(花園大教授)は台湾大学文学部に客座教授として仏教学講義のため12月1日京都発台北へ出張された。

京都大学文学部西アジア南アジア史学コース講義題目(昭和41年度)

研究 岩村 忍	ミ大元馬政志ミを中心とし その前後の馬政および西方 遊牧民のウマの飼育、管理 についての研究	研究 江上波夫 (未定)	伊藤義教	ゾロアストラとその世界
〃 羽田 明	(未定)	〃 岩本 裕	〃	インドネシアにおけるイン ド文化
〃 藤枝 晃	敦煌写本総説	演習 城崎 進	〃	古典ヘブライ語文法及び 「創世記」講読
〃 中村孝志	東南アジア近世史の研究	講読 加藤一朗	〃	ヒエログリフ講読
〃 清水 誠	初期イスラーム税制史研究	語学 大地原豊	〃	初等サンスクリット文法
〃 杉 勇	古代オリエントの諸問題	〃 加賀谷寛	〃	近世インド語
〃 吉川 守	Babylonian Grammatical Texts の研究	〃 井本英一	〃	近世イラン語
		〃 田中四郎	〃	アラビア語(初級・上級)

あとがき ○第17号をおくる。巻頭は香山教授をわずらわして本邦では未開の学田に発掘のスキをいれていただいた珠玉の論文、つづく2篇は本号も前号につづいて新進の雄篇、いずれも感謝にたえない。巻末のものは一編集子によるささやかな筆のすさび。○苦節十年、本誌のめざましい躍進ぶりとは同慶の至りなれど、赤字のたくましい成長ぶりには関係者は頭がいたい。赤字とは申すまでもなく会費の滞納。乏しい中をやりくりして支えている窮状をよろしくご賢察のうえ、会費の滞納だけはなんとしてもお避けくださるよう、いくえにもお願い申しあげる。○そのお願いついでにもう一つ。会員諸氏のご動静、何事によらず(ご身分の変動・著書の出版・海外ご出張その他)お知らせください。彙報記事の作成は難中の至難として編集子の泣き所、それだけにお知らせいただいた時の喜びはまた格別。加えて新会員でもご紹介賜われればこの上なしです。〔編集部記〕